

# Plimoth 植民地の開拓、植民の経緯と 未解明点の提示について

社 河 内 一 郎

## 序

北米初期開拓史を彩り今日も尚、幾つかの未解明点を包含する Plimoth 植民地の拓植実態については数多くの研究が試みられて来たが現在も謎のままに残されている実状である。然し、この故にその模索を続けることもまた少なからぬ魅力と研究意欲をそそる次第である。ところで、本問題に関して、先に本学研究論集で、“Plimoth 植民地の開拓、植民の経緯とこれを経済的側面より眺めて”と題し、また、北米開拓、植民の実態と植民地時代から18世紀前半に至るアメリカ産業の発展過程を概観して（その一）”と題し、さらに、拙著、“建国十三邦植民地の成立史概説”の中でこれを取上げたのであるが、本稿に於てはそれらの大要を反復し、最後に幾多の主要未解明点を極めて素朴な条項式方法によって列挙してみたいと考えるものである（順不同）。従って本説に関しては、前記諸拙稿と重複する点多々存するのであるが、その点は読者諸賢の御諒承を得ておきたい。尚、Plimoth 植民地拓植史の研究上、その決定的史料である William Bradford の “History of the Plimoth Plantation (1856, Boston)” は、New England の初期開拓に関する唯一の基礎史料として最も貴重なもので、1630年から1650年にわたって記述された彼の体験記で、本書は彼が親しく体験した過去の諸事実を想起しつつ綴ったもの故、その叙述の中には若干、様々な不鮮明さ或は矛盾を内包しているのはやむを得ないところであろう。その故に、本植民地開拓史の研究上未解明点が今尚、多々横わっ

ていることを失ず急頭におかねばならない（本稿は、近い将来九州史学会に於て報告予定原稿の梗概である。）。

## 本 説

先ず主としてイギリス領アメリカ植民地の拓植の問題を考察する時、一般的に理解しておかねばならないことは、周知のように、これには二つの立場が併存するといわれることである。即ち、端的に申して、一つはこれを外部的に捕捉する立場である。前者は帝国学派の **Charles McLean Andrews** (1690—1750) をその代表とし、後者は革新派なる社会経済史学派の **Curtis P. Nettels** をその代表とする。このことに関して、**Andrews** はその主著なる “**The Colonial Period of American History (1934-38, N.Y.)**” の序文に於て、“私は多年、諸植民地をその正常な史的背景の中に於て、わが植民史の全面的な実態を発見する為一般的立場とは別個の有利なそれから史料を再吟味すること、普通に行なわれるように植民地を眺めるのではなく、史的発展の自然的推移を辿りつつ、然も偶発的事件による全般的先入観を排除することが不可欠だと確信して来た。その為私はこの対象にイギリス側から接近を試みた。そして17世紀に建設されたイギリス西方植民地のすべてを包含させようとする視野を拡大したのである。”と述べている。即ち、**Andrews** の立場はすべての偏見を排除して植民地時代自身を包括的に把握し、次にイギリス帝国全般との政治的関連を重視して17世紀に主点をおき、更に建国十三邦植民地とイギリス帝国の全西方植民地を志向し、**Barbados** や **Jamaica** などをも視界の中に設定するもので、この西方拡大説は、現今では **Lawrence Henry Gipson** {**The British Empire before the American Revolution (1956-61, N.Y.) (10Vs.)**} なる人がこれを唱導しているのである。これに対して **Nettels** は同じくその主著なる “**The Roots of American civilization (1938, N.Y.)**” の序文に於て、“歴史は現在及び未来における行動の案内者である。自国の発展状況を知る者、

そして自国文化の諸要因を理解する者こそ現在の問題に果敢に然も無駄な労力を除いて、知性を持って立ち向う資格を十分所持する者である。植民地時代の研究者は不断に二つの方向へ牽引される。その一は、該時代以来経過した時間に向って、この方向で人々は現代の特質を植民地時代の起源と結合し得るであろう。他の一は、遙かなる過去に向って、この方向で人々は植民地時代から生存した恒常的影響力の源泉を理解するであろう。私はアメリカ史のヨーロッパ的背景を強調した。それはこの背景自身の為ではなく、合衆国をして今日あらしめた諸勢力を解明する為に他ならないのである。”と記述している。尚、わが国では、藤原守胤〔アメリカ建国史論（1940、東京）〕、宇治田富造〔重商主義植民地体制論（1961、東京）〕が前者の立場を取り、今津 晃〔アメリカ革命史序説（1959、東京）〕が後者の立場にあり、そして高木八尺〔米國政治史序説（1931、東京）〕がその中間に属すると見做される説がある〔富田虎男：北米植民地一岩波講座―世界歴史（1974、東京）〕。

ところで、初期アメリカ大陸への拓植諸国即ち、黄金の理想郷“El Dorado”を求めて California, Florida, Mexico 及び中南米に封建の大土地所有制をそれぞれの本国から導入し、“土地の殲滅、奴隷及び鉱山の埋没”といわれた植民地開発を強行した Spain, 1608年の Quebec 植民地に出発して New France 植民地を開拓した France, 1614年の New Amsterdam における Trading Post 設定に始まり、1629年以降 Patroon System を採用して植民地開発を展開した Holland 及び1620年と1607年の両年にわたって北米東海岸の組織的植民地を設定したイギリスの中、イギリスが現代合衆国建設への基盤を形成したのは、この国の堅実な定着移住民により加えて当時のイギリス国内における最も堅固な中産的生産者階層を中心とする人々によって遂行された点に先ず注目せねばならない。

さて、本稿に於ては、イギリス植民事業の原型とされる Virginia 植民地、正確には南 Virginia における London 植民地とならびに New England 地域における最初のイギリス人による組織構造的植民地だった

Plimoth 植民地の中、特に後者を取上げ、極度に史料難とはいえ主として政治史的な面からその拓植の経緯を再考察し、本稿序の部に述べたように、そこに顕在もしくは潜在する諸未解明点を可能な限り全面的に摘示、列挙してみたいと思う次第である。

ところで、ここに取上げた Plimoth 植民地は、北米東海岸に企てられた諸植民地拓植の成立年代順位から見れば、第一次的なものではなく、かの Pilgrim Fathers の到達前1606年、イギリスの West Country Men の一人で探険家、John Popham (1531—1607)なる者が Bristol, Devonshire, Plymouth や West Country 住民の要望に応じて毛皮、木材や魚類の豊富な所謂 New England 地方の開発を企図し、1607年5月31日、イギリス探険家 George Popham (—1608) と Richard Hakuluyt (1552頃—1616) が Bristle 商人の援助で Speedwell 号、Discovery 号なる二隻の探険船、120名の移民をもって Plymouth 港を出帆、New England 沿岸に到達してこの地域を探查、同年8月18日、Kenebec 河 (Sagadahoc河) の入口即ち、Popham Beach に所在する半島へ上陸、岩礁帯の砂しに Fort St. George を築き、Popham を中心として植民地開発協議会を結成、一個の教会と十五軒の丸太小屋及び倉庫を設けたが、一行は拓植の意欲に欠げ多数の者は当初厳冬の前に脱走し、残留者僅かに45名 (通説) {David Hawke : The Colonial Experience (1966, N.Y., Kansas City, Indianapolis) では44名とある。}、やがて陸河共に氷結し、且 Popham も急死し、詳細は不詳であるが、この Popham 植民地の建設は完全失敗に終わったのである {Lyon Gardiner Tyler : England in America (1904, N.Y. & London)}。ところで、イギリスの著述兼船員を業としていた John Smith (1579—1631) は、その記録、“A Description of New England (1616, London)” もしくは、“The General History of Virginia, New England and the Summer Island (1624, London)” を残して New England 地方の土壌及び気候更に魚介類の豊富なことを称讃した当時の著名な初期開拓者の一人であり、1607年には Virginia 地域の Jamestown へ上陸したこ

ともあるが、早くから当地域の拓植に多大の熱意を抱き、London 商人から北米東海岸の捕鯨業に雇用され遂に鯨は発見し得なかったが、多量の魚介類を捕獲し、然も1615年の Smith の捕鯨船は消息不明となったが、これを契機として彼の高名は Virginia 地方全般に認められるに至った。彼はこれらの地方を自ら Paradise と呼び、更に当該地方の特定地点30カ所を包括して Canada とか北 Virginia とはいわず、即ち、北 Virginia 海岸を“New England”と呼称した (Carl Heinrich Becker : *Beginnings of the American People* (1915, N.Y.), 高木八尺 : 米国政治史序説 (1974, 東京))。時は1614年ともされている。そして、これらの地点の中、Plimoth 地域と Charles 河一帯と Ann 岬が一括されて New England の地名を止めることになった。尚、1617年にはイギリス人の持来したペスト菌の流行で所謂“清掃”が行われ、Massachusetts 湾一帯の Indians が殆んど全滅という不慮の事件が生じた。ともあれ、Smith の拓植に関する熱意はやがて、イギリス国内の信仰的迫害に苦悩する Puritans や Pilgrims たちへ異常な関心を喚起するに至った。16世紀に入って1593年、農民と手工業者から成る数百名とも (高木八尺) 2万人ともいわれる Separatist 集団、後の Independents 所謂 Brownists は、イギリス England の北東地域なる Nottinghamshire, Lincolnshire 及び Yorkshire に所在し、確固たる勢力を持っていたが、同年、それらの中の Gainsborough 集団が London 集団に続いて Anglican の弾圧を忌避し Holland の同宗派と合体することを有利とし、信仰自由を求めて同国の Amsterdam へ移住を決行することとなった。当時 Yorkshire 地域の南方 London の北部なる Scrooby の町に駅逦長を勤め、後年かの Edwin Sandys (1561—1629) が Virginia Co. of London から土地保有権、移住権、物資供給権、本国貿易の独占権及び7年間の関税免除権を認めた南 Virginia における特殊開拓地への Charter を得たこと (1622年頃) と関連して Hndson 河口に交易及び漁業植民地を建設せんとしたの構想を持っていた William Brewster (1567—1644) が後の Plimoth 植民地総督として活躍した William

Bradford (1590—1657) と共に健在だった。そして、彼らは1608年、同志100名と共に Holland へ渡り1カ年にわたって Amsterdam に待機、そこで London Separatists と Gainsborough Separatists の二個の教会が併立して両者の確執の著しいことを知り、たまたま到来した London Separatists と合流し、300名の者が次年1609年5月某日、Leyden へ移住したが、この Scrooby 集団が後年、“New England の Pilgrim Fathers” と呼称されるもので、これは1840年代から広く用いられた用語とされている。彼らは12カ年にわたって Holland の地に彷徨の旅を続けたが、一行の実直性や勤勉性は Holland 人の間に好評を収め、彼らが同国を去る頃には非難に値する何物もないと迄高く評価される程であった。また、Leyden の町も繁栄し、その人口も100名から300名へと増加した。然るに、彼らの渡来後12年、Holland から格別の思想的圧制を受けたのではないが、1578—81年の Spain-Netherland 戦争後再び開戦の兆しが Leyden の町に現われた為、1617年の夏季以降彼らは服役と徴税を恐れ再度、大多数の者が移動を試み始めたのである。かくして、或る者は南方 Guiana 方面へ、他の者は北方 New York 地方を念願したが、終局的には Virginia 方面を志向するに至った。この間イギリスでは、London 商人70名の代表なる Thomas Weston (1575—1644) によって7,000ポンドの渡航資金が整えられ、1618年(月日不詳)の7カ条 Leiden Agreement 及び1620年7月10日付の10カ条 Leyden Agreement 修正がとりきめられ、この壮挙が決行されることとなった {Henry Steele Commager : Documents of American History (1946, N.Y.)}。かくして、彼らは先ず1620年6月某日、Speedwell 号で Holland の Delfthaven から London へ向ったが、一行の員数は50名足らずに過ぎなかったと記録されている。イギリスへ帰航した一行は London へ到来していた同志100名足らずの拓植者(正確な数は不明)と合流し、1620年8月5日、用意された3本のマスト、180トンの Mayflower 号と前記60トンの Speedwell 号の二隻に分乗し、Southernpton を出航したが、後者はイギリスの Lans Ends 岬の西方500km の地

点で浸水著しく、この老朽小型船は到底長期航海には堪え得ず、やがて Dartmouth へ寄港、そして Plymouth へ引返し、その間一行に脱落者を生じた為結局102名の者が Mayflower 号一船のみで Plymouth 港を出航することとなった。

Scrooby 以来の者は僅かに12名、Leyden 以降の者も35名に過ぎなかったと記録されている。ここで、一行指導者の一人なる前記 Bradford はこの一行を指して“Pilgrims”と呼び、これは新約聖書へブル書 (Chapter 11-Article) — 3 の語に出て、1840年代から広く用いられたとされるが如何であろうか (この語は彼ら自らは使用しなかった。) {Richard B. Morris : The Life History of the United States (1963, N.Y.) (Vol. 1)。さて、Mayflower 号の出帆は1620年9月6日、彼らは今後一カ年も生存可能か否かの不安におののきつつ (Hawke—They had only the dimmest chance to survive the next twelve month.) 大西洋の嵐と近接する冬季の到来におびえつつ向う65日間、3,400km 余りの長期旅行に出たのであるが、然も不用意にも経済的配慮を欠ぎ牛類や家畜類など何一つ主な食料もしくは耕作用具を持参しなかったと記録されているが、これは容易に理解し難いところである (Hawke—They Brought no cattle or livestock of any kind ; they had, said Bradford, no butter, or oil, not a sole to mend a shoe, not everyman a sword to his side, wanting many muskets, much armor, etc. They were truly Pilgrims, poor and innocent of what of lay ahead, and could only trust to the good providence of God.)。

ところで、一行の志向点は1606年4月10日付の London Co. (後の Virginia Co.) {イギリス国王 James I (1566—1625) (1603—25) の時、同じく Charles I (1600—49) (1625—49) の名の下にイギリス政府から London とその近傍投機業者によって設立を認められたもの。} に付与された“First Charter of Virginia, 1606” {William McDonald : Select Charters Illustrative of American History (1606—1775) (1899, N.Y. & London), Commager} 全条文20項の中の第4項即ち、“ここに付与しま

た同意を与え、Sir Thomas Gates ら及び今後協力すべき London 市の Adventurers に第一の植民地と呼ぶべきこと、また、34—41°Nの間即ち、South Virginia, {M. Harris : Origin of the Land, Tenure System in the United States (1953, Ames, Iowa)}, 彼らの適当と考える地域にその移住を開始すること、また、彼らはすべての土地、土壌、地面、森林、河川、港湾、沼沢、水流、漁業、鉱物及び貨物を当初の移住地点を中心に50イギリス・マイルの幅員を以て海岸より西方及び西北方にわたる地域に於て所有することを認める。且また、同地方に於て定住し、自らの安泰と防衛の為その内部に建築し保塞を築くことを認可する”。とあるように、所謂 Virginia 北部なるを以て、Hudson 河のやや南方なる41°N線上 (Potomac 河と現在の Maine 州、やや北方なる Bangor 地方、広義の New York 沿岸だったが、海潮の逆流と浅瀬の障壁の為、Co. の指定地より900マイル (1,500km.) 北方なる現在の Massachusetts 州、42.5°N線即ち、1602年一船長 Bartholomew Gosnold (不詳) に命名されたとみられる Cape Cod、後年、John Smith によって James 岬と呼ばれたとされる地点へ到達したのである。これは通説であるが、実はこの針路変更は船長に意図するものがあり、その故意によるとの異説も存し、一行の中、非 Puritans は激怒したとも伝えられるが、この間の状況は不詳である。ところで、この地は先きに1617年、イギリスから流入したペスト菌の流行で Massachusetts 湾岸から Narragansett 湾周辺一帯の原住民 Indians (Argonquin 語系の Pohattan, Delaware, Narragansett 族など) は殆んど全滅しいわば空白地帯だった為、彼らはこれを以て神の選民の前途を清掃化したものと確信したといわれる {William J. Hagan : American Indians (1961, Chicago)} (尚、所謂 Virginia 方面の初期清掃は、この空白地帯の開拓と Indians からとうもろこしを奪取することから開拓されたという)。は実は一行の到達予定地点は、前述のように、“Plymouth First Charter, 1606” に見える通り、この Charter の指示範囲即ち、一般に北 Virginia と呼ばれた 38—45°N の地帯だったわけであるが、この現実には却っ



て宗教的契約制を社会的契約制へ移行するという利点も存したのである (Charles McLean Andrews)。ともあれ、一行は母国を後にして65日間、1620年11月11日 (旧暦)、現在の Provincetown なる Cape Harbor (Plimoth) へ入り、同年12月16日 (旧暦) 迄に全員が彼らの命名した Plimoth Rocke へ上陸を完了した。この地こそ Indians の土語でいう Patuxet 即ち、これまた彼らの命名による New Plimoth, 後世広く呼称さるる Plymouth Plantation である {1614年, John Smith によって既に命名されていたとの説もある—Allan Nevins & Henry Steele Commager : The Pocket History of the United States (1942, Washington)}。65日間に及ぶ筆舌に尽し難い長期航海の実況も Bradford によって克明に描写されているが、例えば先ず、“驚異の眼を輝やかせた一行は上陸と共に森林や雑木林におおわれた見渡す限りの天地、未開の荒涼たる光景を眼前に、廣大無辺の荒狂う大洋を越えて彼らを運んだ天なる神に跪いて感謝の祈祷を掃げた。”と活々した表現が見られるのである。そこで、この点原文を辿ってみれば、  
„Being thus arived in a good harbor and brought safe to land, they fell upon their knees and blessed the god of heaven, who had brought them over the vast and furious ocean, and delivered them from all the periles and miseries thereof, againe to set their feete on the firme and stable earth, their proper element — Being thus passed the vast ocean, and a sea of troubles before in their preparation — they now had nor friends to wellcome them, no inns to entertaine a refresh their weatherbeaten bodys, no houses or much less townes to repaie too, to seeke for succour. It is recorded in scripture as a mercie to the apostle and his shipwrecked company, that the barbarians showed them no small kindnes in refreshing them, but these savage barbarians, when they mette with them, — were readier to fill their sides full of arrows than otherwise. And for the season it was winter, and they that know the winter of that cuntrie know them to

be sharp and violent, and subject to cruell more to serch an unknown coast. Besides, what could they see but a hidious and desolate wildernes full of wild beasts annd wild men? — Nether could they, as it were, goe up to the tope of Pisgah, — さて、彼らの企図するところは、この空白地域における食料の自給と Indians との毛皮交易業によってイギリス商人からの経済的自立をはかり、この地の拓植を開始するにあった。然るに、その冬は殊の他の厳寒で、彼らは寒気と飢餓に苦悩し然も、潰血病の為多数の者は倒れ、次年の1月から2月に及んでは生存者僅かに50名という惨状だった(高木八尺)。然し、実は58名とする説もある(David Hawke)。尚、この生存者の中、23名のみが辛うじて活動可能者だったと André Manrois は指摘している。然し、3月を迎えると、Samoset や Squanto 種の Indians に続いて Wanpanoag 種の Pokanokets Indians が交友を求めて来会するに至り、とうもろこしの栽培法を伝え漁撈の可能な水流を探索し、特に一行の一人なる Miles Standish は狩猟技術を指導し、さては Pokanokets Indians と感謝祭を開催する程で、一行は漸くここに一安緒することが出来たのである。ところで、同年4月5日、Mayflower号は帰国の途につき、一方拓植者は幾度か餓死の危機に直面したが、かつて Indians によって開墾されていた岩石質溪谷地帯の荒地を打開し、120エーカーの畑地にとうもろこしと小麦を、6エーカーの地に大麦、大豆、豌豆の栽培を試み、同年の夏季に入ると、彼らは七軒の陋屋と四軒の小屋をつくり、ビーバーの毛皮を貯蔵し、畑地には相当の作物を実らせ、自営経済方式と自立精神により素朴ながら経済活動の第一歩に進んだのである(Charles McLean Andrews)。宛もその頃、Thomas Weston が35名の拓植者と共に同年11月某日、Fortune号で来航、食料を持参し、一方、Plymoth 植民地の人々はイギリス国王 James I の名の下に1619年6月9日付の40°—48°Nの海から海への地域開発を目途する Charter を植民地人40名に限定して New England Council から入手し、これは開拓地帯の限界を具体的に明確にはしていないが、これによって植民地人の拓植範

開拓は、遠く Quebec 河畔から Cape Cod, そして Hartford 方面へ及び、植民者の各人は100エーカー宛の土地を、公共建築物には1,500エーカーの地を付与することとなった。時の Plimoth 植民地総督は、初代の John Caver (1576頃—1621) に代って Bradford だったが(彼の在任は、1621年—32年, 35年, 37年, 39年—43年, 45年—56年), 彼の独自の判断によって土地の配分が実施されたと記録されている。然し、この前後の本植民地の土地区画及びその配分内容に関しては、何故か Bradford も全く触れていない為不詳である。尚、広く New England における土地分与の方法は、家族を単位とし一家族の所有地は平均20—80ヘクタールといわれ、小規模ながら平等主義の土地所有制で、中世イギリス Manor の変形した村落共同体即ち、地方自治制の中心で村落或は十字路に小家屋群を擁する農村的自治区—Town System によるものであった。然るに、当年も亦、本植地の諸情勢は不振、植民者は一面、依然として食料難に困惑し、他面、Indians の来襲に絶えず怯えねばならなかった。従って植民地の繁栄は見られず、1630年の Town 数は22, 1642年のそれは10, その人口も3,000人に過ぎなかった。加えて、彼らの支援者なる London 商人、地主及び手工業者70名も遂にこの植民地を放棄し、彼らの所持する船舶その他を売却し、更に London 商人相互間も不和で、1627年に於ては植民者は年額200ドル、9カ年の償還を迫られる程の窮状となった。そこで、彼らはイギリス国王の直接的 Charter を要請したが成らず、1630年2月13日付の New England Council からの Charter を入手したに止まった。ところで、先に1628年3月19日付のイギリス国王 Charles I からの Patent によって (William McDonald) John Endicott (1569頃—1665) が50名の移民団によって開拓した Naumkeag (後の Salem) を志向した John Winthrop (1588—1649) が Nor-Conformist の移民を以て11船舶に分乗、63日間の航海を経て1630年6月12日、Salem に上陸、その頃人員は700名に急減したが、Plimoth 植民地の南方 Charlestown を中心に、“地上における神の都。新なる教会と新なる国家。正当な政教両様の統治組織。”の建設を

理想として、**“The Governor and Company of Massachusetts Bay in New England”** と呼ばれる新植民地を樹立、かくして、当時人口僅か300名の **Plimoth** 植民地は遂に当初の開拓的意義を喪失するに至った。即ち、本植民地は続いて諸情勢振わず、漸く農業のみ共同体形式の経営方式から個々の農場経営型へ移行してその効果を上げたが、植民地経営の本質的条件を欠落し、水産業や毛皮取引業に地の利を占めた程度で、植民者の不屈の精神にも拘らず植民地は衰微の一途を辿り、1691年に入ると **Massachusetts** 湾植民地に併合の悲運におちいるのであった。然し、政治面に於ては、総督、参議員及び自由民の総会議という利点を持つ民主政治の端緒と目さるる形態を以て進展し、経済面では一面、交易植民地として発達し、他面、土地の自由保有或は **Manor** 制による大農地的所有志向などで最も純粋な農民社会として展開されたところに **Plimoth** 植民地の植民地的意義は十分理解されるであろう。

### 未 解 明 の 諸 点

以上、**Plimoth** 植民地の拓植実態について、その大要を概観したのであるが、**Bradford** の原著を基底としてその経過を追跡すれば以下列挙するように、そこに数々の未解明点を見出すのである。即ち、(1)1593年に **Gainsborough** 集団が **London** 集団に続いて **Holland** の **Amsterdam** に移住したとなっているが、この具体的状況は不詳(2)また、1607年に **Scrooby** 集団も一時的に **Holland** へ移住しているが、その詳細も不詳(3)1607年の **George Popham** 植民地建設失敗の状況も不詳(4) **Pilgrims** を乗せた **Mayflower** 号がその志向していた  $41^{\circ}\text{N}$  線上なる所謂 **N. Y.** 海岸地帯へ着かず、東海岸を南下して  $42.5^{\circ}\text{N}$  線の **Cape Cod** へ到達したことは **Richard Hofstadter, William Miller & Daniel Aaron** はその著、**“The United States (1957, Englewood, New Jersey)”** の中に、**„Mayflower, accidentally made their landfall off the council’s shores at Cape Cod.”** とも

あり、当時の悪天候や〔東大アメリカ史学会：原典アメリカ史，Vol. 1 (1950, 東京)〕操船技術の未熟によるのではないかというのが通説であるが、別に船長 Miles Standish の故意によるとの説もある〔John Smith : A Description of New England (1616, London), Samuel Eliot Morison : Growth of American Republic (1942, N.Y.), David Hawke : Colonial Experience (1966, N.Y. & Kansas etc.)〕。果していずれが事実か不明(5) Virginia 地域の Jamestown 植民地を始め Plimoth 地方への拓植民は普通4カ年の期限付で通説によれば、渡航費10-12ポンドの支払いを条件とする全渡航者の約1/3を占める Indentured Servant だったとされるが、別にこれは7-10ポンドだったとの説もある (David Hawke) (6) Mayflower 号の渡航日数は一般的に65日間 (William Bradford, 高木八尺) となっているが、別に64日間の説もある (Samuel Eliot Morison)。これは一行が Cape Cod へ到達した日を取るか或は Cape Harvor の Provincetown へ入港した日を取るかの相違であろう(7) Mayflower 号と Speedwell 号両船がイギリスの Southernpton を出帆したのは通説では、1620年8月5日となっているが、別に8月14日の説もある (東大アメリカ史学会) (8) Mayflower 号の船名は、何故か Bradford の記録には全くこれを見出し得ないのである(9) Cape Cod の名称は通説では、John Smith によるというが、別にイギリスの一船長 Batholomew Gosnold (1572-1607) の命名との説もあり、この点不確実であるが、これは Smith 説が温当であろう(10) Pilgrim Fathers は寒気と飢餓の為1621年の1月-2月に生存者僅かに50名余だったと見るのが通説であるが (Bradford, Lyon Gardiner Tyler), Daniel Hawke や高木八尺は約50名とし、これは必ずしも明確な数字ではないと思われる(11)1608年、Scrooby 集団の Separatists 100名が Holland へ渡って Amsterdam へ滞在するに至ったのは William Brewster が中心的指導者としてその役割を演じたというのが通説であるが、実はこれは John Robinson (1575頃-1625) だったと見る説もある (高木八尺)。然し、Bradford も Brewster と明記していることを知らねばなら

ない(12)更にこの Scrooby 集団が凡そ12カ年にわたって Holland 国内彷徨の旅を続けた時の主要指導者は前記のように Robinson だったとするのが高木八尺説であるが、これは通説通り Brewster を中心とする Bradford Robinson 3名の共同統率と見るのが妥当であろう(13)1615年、John Smith が2隻の探険船を New England 地方へ送った記録は存するが、その実態は不詳(14)1620年10月某日、London 商人 Thomas Weston が Plimoth 植民地へ至って食料を供給し植民者の危機を救ったが、その実態は不詳(15)Pilgrims の一行は London Co. から1606年4月10日付の Charter を入手しているのに更に出発の前年、即ち、1619年6月9日付の特殊 Charter を New England Council から与えられたが何故再度の Charter を必要としたか(16)Plimoth 植民地が Massachusetts 湾植民地に併合されたのは1691年であるが、後者の開設は1628年の John Endicott に始まるとされる。然し、別にこれは1626年に開始されていたとの見方もあり、この点如何であろうか。(17)Holland 滞在中の一行の中、終局的に新大陸開拓への決意を固めたのは、Bradford の記録では50名足らずとされ、また、イギリスで London へ到来していた同志の数は同じく100名足らずと記されているが、両者共にその正確な員数を把握することが出来ない(18)イギリス England の北東地域へ居住した Separatists の員数は16世紀末に於て普通数百名といわれるが、一方1593年に20,000名と見る説もあり(高木八尺—Walter Raleigh の推計による)、余りにもその数に著しい差異が見られるが、これは如何であろうか(19)Pilgrim Fathers 102名の中、果して何名が Puritans だっただろうか。Mass. Historical Society の“Bradford’s History of the Plimoth Plantation (1899, Boston)”の“Appendix”の部に全員の人別(性別、成年別、独身別、家族構成別)について、詳細明示しているが、遺憾ながら彼らの信仰宗派別に関しては何らの記載も止めていないので、その正確な内容を理解することが出来ない。

そこで、推定諸説を列記すれば、Richard B. Morris は、全員の中、50名は自作農、雇用労務者及び年季契約奉公人の非 Puritans だったとし、

Richard Hofstadter は、35名のみが献身的な Puritans だったとし、André Maurois は、すべてが Puritans ではないと示し、Daniel Hawke は、1/3 が Puritans だったと指摘し、またわが国では、中屋健一がそれは約 1/3 だったと示す程度である<sup>(20)</sup>次に Mayflower 号に乗船していた Pilgrims の総員数であるが、Bradford の正確な記録には全員102名と記されている。然し、仔細にこれを見れば、それは成年男子34人、その妻女18人、男児20人、女児8人と Servant 男子19人、同じく女子3人の合計数で、実は別に以上全員の雇傭人3人と水夫2人がいたわけで、実際の乗船者数は107名となる。従って、Pilgrim Fathers といえは限定された102名を指すこととなる。尚、航海途上1人の成年男子が死亡したが代って1人の男児が出生した為合計数に変化は見られない。<sup>(21)</sup> Pilgrim Fathers の呼称であるが、この語は新約聖書へブル書に出るもので、Bradford 自ら一行を呼んだ語とされるが、実は彼らの呼名ではなく1840年代から広く用いられたとするのが通説である。具体的なことは不詳<sup>(22)</sup>彼らは Holland が信仰自由の地としてこの地へ逃れているが Amsterdam 到達後早くも排斥されたとあり、然も、生活の脅威に直面し、社会的及び経済的圧力に堪えかねて新大陸移住を決意したというが、事実はむしろ彼らの勤勉性や実直性を高く評価されて Holland 当局は十分保護を加えているのであって、これは著しい矛盾と考えられるが如何であろうか<sup>(23)</sup>彼らは London Co. の Charter はこれを使用しなかったというが、然も彼らは Leyden Agreement によって London 商人の十分な援助を受ける準備を進めたとはいえ、この Charter を無視したとは考えられず、その点如何であろうか<sup>(24)</sup>彼らが1621年6月1日付の Charter を入手する迄の Plimoth 植民地の土地区画及び土地の拓植者への配当関係については Bradford の記録にも全く記述を欠くので、それらの内容をうかがい知ることは出来ないのである。

### 基本的主要参考文献

- Massachusetts Historical Society: Bradford's History of the Plimoth Plantation (1856, Boston)
- William Bradford: History of Plimoth Plantation (1622, Boston)
- John Smith: A Description of New England (1616, London)
- Edward Winslow: Young's Chronicles of the Pilgrim Fathers (1844, Boston)
- John Winthrop: The History of New England from 1630 to 1649 (1825—26, Boston)
- Charles McLean Andrews: The Colonial Period of American History (1936—38, New Haven)
- William McDonald: Documentary Source Book of American History (1928, N. Y. & London)
- Henry Steele Commager: Documents of American History (1947, N. Y.)
- Edward Potts Cheyney: European Background of American History (1904, N. Y.)
- Benjamin W. Labaree: Colonial Massachusetts-A History (1979, N. Y.)
- David B. Quinn: New American World, A Documentary History of North America to 1612 (1979, London)
- Edward Channing: A History of the United States (1905—13, N. Y.)
- "      : The Pilgrim Fathers Significance in History Land and Sea (1953, N. Y.)
- Lyon Gardiner Tyler: England in America (1580—1652) (1904, N. Y.)
- Alhert Bushnell Hart: American History told by Contemporaries (1898—1902, N. Y.)
- Charles McLean Andrews: The American Nation: A History (1904, N. Y. & London)
- Thomas Prince: A Chronological History of New England (1736—55, N. Y.)
- Max Farrand: The Development of the United States (1918, N. Y.)